
夢限の彼方 第1部

星野由紀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢限の彼方 第1部

【Nコード】

N3780T

【作者名】

星野由紀

【あらすじ】

飛行機嫌いの私。

無事に飛んだと思った飛行機の機体に異変が！

落ちた先は見知らぬ土地。

話す木？猫のような人間？

先の展開は・・・作者すら想像できません>><

序章

「落ち着けや」

胸の前で手を組み、うつむいてる私を見て、兄が少し笑いながら言った。

「そんなこと言うたって・・・」
何度乗っても飛行機は好きになれない。

上昇気流がうんたら・・・理論的に飛行機が空を飛ぶのは理解してる。

でも、こんな重たい鉄の塊が、しかも荷物や人を馬鹿ほど積み込んで、いったいどのくらいの重さだろ。

これが空を飛ぶ？まさか・・・。
心情的に飛行機が空を飛ぶことが理解できない。

そんな私を見て、兄は笑いが抑えられないようで、ずっと窓の外を見ながら肩を揺らしている。

私の気持ちも知らずに、飛行機は滑走路へ。
エンジン音が上がる。

加速する。どんどん加速する。

シートの背もたれに押し付けられる。

目を開けてられない！

機体が斜めになり、タイヤからの振動がなくなる。

浮き上がったらしい。

目を閉じる。

機体がどんどん上がっていくのを感じる。

兄が私の顔を覗き込む心配がする。

目を開けると、すぐ近くにある兄の顔。

私と目が合うと、こらえきれずに兄は吹き出した。

「笑いすぎや」

と、怒って言うてみたが、自分でも声が震えてるのがわかった。

「飛行機事故と交通事故とどっちが多いと思ってるねん。飛行機はめったに落ちんわ」

「そんなこと言うたって・・・落ちたら絶対死ぬやん、飛行機はて・・・」

機体はまだ斜めになったまま。

私はまた目を閉じた。

地面を走ってるわけではないのに伝わってくる振動が気味悪い。

ポン。

チャイムの音がした。

安定飛行に入り、シートベルトをはずしてもいいという合図。

ため息をついた。

安堵のため息ではない。

ここまで上がってしまったら、落ちたら絶対死ぬというあきらめのため息。

「無事に離陸！」

おどけて言う兄に、私は黙ってうなづいて見せた。

「無事に着陸できるといいねえ」

からかって言う兄に、反論する気力もない。

そのとき、振動が消えた。

まるで教室のいすに座っているかのように、まったく振動がなくなつた。

今まで何度か飛行機に乗ったが、こんなことはなかった。
兄も異変を感じたらしい。

兄と顔を見合わせた。

「なんか変・・・」

言いかけたときエレベーターに乗ってる気がした。

まっすぐ下に下がるエレベーターに。

体がシートから浮き、シートベルトがおなかに食い込む。

落ちる！

この飛行機は今、まっすぐ下に落ちていってる！！！！

生還

絶叫マシンは大嫌い。

フリーフォールに乗ったことは生まれてから一度もない。

でも、今のこの状態がフリーフォール以上のものだというのはわか
かった。

無意識で兄の手を握った。

兄も私の手を握り返してきた。

それを感じたとたん、意識が薄れていった……。

水の音……？

意識がある？死んでない？ここはどこ？

天国って実在する？

少し目を開いてみた。

青い空、太陽……。眩しい。

波の音？冷たい……！

ゆっくりと、しつかりと目を開いてみる。

湖？池？海？

体が半分水の中にある。

また、目を閉じた。

静かに……。思い出してみる。

確か……。飛行機に乗ってて、落ちた……。はず。

急にフリーフォールになって……。兄の手を握って……。

兄？！
お兄ちゃん？！

兄と一緒に落ちた。一緒に落ちた。
そう思ったとたん、反射的に体を起こした。
周りを見回した。

・・・何も無い。

飛行機が落ちたはずなのに、何も無い。
機体の破片ひとつ落ちていない。

兄の姿もない。

静かな浜辺。

波の音だけ。

ここはどこ？兄はどこ？

そのとき、気づいた。

無傷だった。どこも痛くない。

両手を見た。擦り傷ひとつない。

飛行機から落ちたと思ったのは・・・夢？

あれ・・・？

私の記憶は・・・？

ゆっくりと立ち上がり、浜辺へ上がった。

そのまま座り込んだ。

飛行機から落ちて無事なはずがない。

機体の破片ひとつ落ちていないなんてこともないはず。
やっぱり私の記憶がおかしくなったのかも。

考えてみたが、何も思い出せない。

最後の記憶は握り返してきた兄の手とフリーフォール。

ここがどこなのか、これからどこへ行けばいいのかまったくわかんない。

「ここには」

急に背中から声をかけられた。

到着の浜辺

振り返ると同じ年くらいの女の子が立っていた。
太陽と重なり、顔はよく見えない。

「ここは、どこ？」

馬鹿な質問かと思ったが、問いかけてみた。

「到着の浜辺。…ということは、あなたも海の向こうから飛ばされてきたんだ」

「海の向こうから？」

おうむ返しに聞き返した。

海の向こうからってどうということだろう。

ここはどこなんだろう。

飛行機から落ちたのは、・・・夢？

「わからないことだらけでしょ」

少女は私の考えを見透かしたかののように、そう言った。

「私の家は、すぐそこだからついてきて。とりあえず着替えましょ」

少女に促されて立ち上がり、後に従った。

何が起きてるのか理解できていない私には、そうするより他はなかった。

並んで立つと、彼女は私よりほんの少し背が高かった。

改めて彼女を観察した。

カーキ色のパーカーにカーキ色のパンツ。

ポニーテールに結んだ髪は少し赤みをおびているが、黒髪。

言葉も通じだし、ここが日本であることは間違いない。
到着の浜辺？どこだろう……？

「ここは どこ？」

もう一度尋ねてみた。

「到着の浜辺だつてば。んと……ムルナラの南端みなみはしつてことを聞
きたいのかな」

ムルナラ？どこだ、それ？

聞いたことのない地名。

「ムルナラ……つて言いました？どんな字、書くんですか？」

「字？」彼女は一瞬立ち止まって振り向いた。「どんなもこんな

も ムルナラはムルナラ」

そういうと彼女は、また歩き出した。

ムルナラ……ムルナラ……聞き覚えのない地名。

黙って彼女について行くしかないようだ。

砂浜から続く道はそのまま林の中に続いていた。

海から離れると波の音も消え、静寂だけだった。

私と彼女の足音だけだった。

いくらか歩かないうちにログハウスが見えた。

「ここよ。どうぞ」

彼女が扉を開けてくれた。

中は真っ暗だった。

入ることがためらわれた。

明るい昼間。

林の中とはいえ、日は十分に差し込んでいるのに、真っ暗な室内。
扉を開けたまま、彼女が先に中に入った。

「2・3日留守にしてたからね、窓、閉め切ってて・・・」
ガタガタと物音がした。
中が明るくなった。
雨戸でも閉めてあったのだろう。

中央に大きな木のテーブルと椅子が4つ。
正面に暖炉が見えた。2方の壁に窓・・・珍しい。突き上げ戸だ。
ガラスは入っていない。
ベッドとチェストがひとつずつ。
殺風景といえば殺風景かもしれない。

さっきは気づかなかったが、彼女は腰にナイフを下げていたようだ。

小ぶりのナイフで、それをテーブルの上に置くとチェストの引き出しを開け、中から服を出した。

「こんなものしかないけど、濡れたままよりましでしょ。」

ここ、一部屋しかないから。女同士だし、ここで着替えて」
彼女から受け取ったのはスウェットパーカーとひざが隠れるくらいのロールアップカーゴパンツだった。

彼女に背を向けてすばやく着替えた。

サイズはちょうどよかった。

私が着替えを終わったのを見て、彼女が言った。

「さて、何から説明する？何、聞きたい？」

ログハウス1

何から聞こう？

改めて聞かれると、分からないことだらけで、何を聞けばいいの
か思いつかなかった。

「あなたの名前は？」

私の口から出た質問は単純なものだった。

「あ、名前も名乗ってなかったね。」

私はハヌル」

「私は……」

名乗ろうとした。

え…私は誰？

私の名前は？

思い出せない。

やっぱり飛行機事故のせいで、記憶喪失？

「自分の名前がわからないんでしょ？」

彼女はチェストの下の方の引き出しからケトルとカップを出した。

「私もそうだった。」

あの浜辺にたどり着いた時はなあんにもわからなかった。

ちようど1年くらいになるかな。

ちよつと待っててね」

彼女はカップを2つ、テーブルの上に置くとケトルを持って、入
ってきたドアから出て行った。

すぐに戻って来ると、暖炉に火を入れ、五徳にケトルを置いた。

そんな彼女の動きを見ながら、飛行機に乗ってから今までのこと
を順番に思い出してみた。

どこからどこまでが現実で、何が夢なのか…。

「あなたはどこに住んでたの？」

逆に彼女から質問された。

「神戸」

自分の名前すら覚えてないのに、どこに住んでたかは覚えてるらしい。

「コウベ？聞いたことないなあ」

神戸って・・・そんなに知名度低いのか。

「神戸・・・知らん？」

「うん」

「有名だと思っててんけどなあ」

「きつと違うとこだね」

そう言う彼女の一言一言が理解しがたかった。

彼女の説明によると、彼女も私も、こことはまったく違う世界から飛ばされてきたらしい。

なぜそうなったのかわからない。

でも、この土地の人たちは、『えらばれしもの』だからここに呼び寄せられたと言う。

誰が選んだのかはわからない。

何のために選ばれたのかもわからない。

ここに住んで1年近く経つ彼女にもわからないらしい。

と・・・そんな話がにわか信じられるわけもなく、誰かにだまされているとしか思えなかった。

話しているうちにケトルの湯が沸いた。

ナイフを使って、熱くなったケトルを彼女はテーブルまで運んだ。カップ類を出したのと同じ引き出しから、小さな箱を取り出した。ふたを開けると、ハーブのような香りがした。

「いい香りですよ。」

このあたりで取れる薬草。

気持ちを落ち着かせてくれるよ。」

彼女はケトルに葉を数枚いれ、蓋をしてしばらく待った。

それからカップに湯を注いだ。

きれいな青い色をした、少し飲むには抵抗のありそうな青い色をしたお茶だった。

彼女はカップを両手で抱えるように持つと、フーフーと吹きながら一口飲んだ。

それを見てから、私もカップを手にして少しだけ飲んでみた。少し酸味が感じられるが、飲めなくはない。

その時、急に外が暗くなった。

窓は開いているし、玄関のドアも開いているのに光が消えた。

急に夜中になったようだった。

「テーブルの下に！」

彼女が叫んだ。

「？」

ボーっと座っている私を、彼女はテーブルの下に押し込んだ。

ログハウス2

私はテーブルの下に潜り込んだものの、カップを床に落としてしまった。

青いお茶はすぐに床に染込んでいった。

コンコン。

天井から音がした。

石でもぶつけたような、ノックをするような、音。

「帰ってるよ」

ハヌルがノックに答えるように言った。

「どうだった？」

外から男の音がした。

「見つからなかった」

またハヌルが答える。

「そうか。今度はいつ行く？」

男の音が答える。

「2 - 3日したら行くけど、少し休ませて」

ハヌルが答える。

「時間がないんだ。頼む」

と、男の声。

「わかったから」

ハヌルが答えると、外の闇が消えた。

また光が部屋の中にさしてきた。

私はテーブルの下からハヌルを見上げた。

ハヌルは大きいため息をついてから、私に微笑みかけてきた。

「もういいよ、出てきて」

テーブルから這い出た私にハヌルが手を貸して、立たせてくれた。
「今のはナムって言うんだけどね・・・」

ハヌルの説明によると、ナムの娘が病気らしい。
治すための薬草を探さなければならない。

ナムはこの林から出て行けないため、代わりにハヌルが探しに出ているらしい。

「ナムは私以外の人を信用してなくて・・・」

あ、お茶、こぼしちゃったね」

ハヌルは私のカップに青いお茶をもう一度入れてくれた。

「ところで、なんて呼ぼうか。

名無しだと、呼びにくい」

やはり思い出せない。

なんて名前だろう、私は。

「自分で決める？私が名付け親になろうか？」

ハヌルがちよっとおどけたように言った。

自分の名前すら思い出せない私は微笑むことすらできなかった。

「んー」。

いざ名前をつてなると、思いつかないものね」

ハヌルは腕組みをして見せた。

1年前に同じように到着の浜辺にたどり着いたハヌル。

私の今の不安な気持ちをすべて見透かしている気がする。

「ピヨル？・・・パダ？・・・タル？

この中から選んでみて」

ピヨル？パダ？なんだ、それ・・・？

それに樽？

ハヌルが候補に挙げた3つのうち、2つは意味がよくわからない。
私の答えは

ログハウス3

「リン」

「え？」

私の答えに対して、目を丸くしたハヌル。

しばらくじつと私を見つめていたが、吹き出した。

「了解！リン！」

人につけられるより、自分でつけた方がいいよね。

実は、私の名前も自分で決めたんだ」

ハヌルはテーブル越しに手を差し出してきた。

ハヌルの手と顔を交互に見ていると、ハヌルはテーブルを回って

私の横に来て、私の手を取った。

「握手じゃん。」

あらためてよろしく、リン！」

「よ……よろしく、ハヌル」

そうやって、私の名前はリンに決まった。

その後、私は小屋の裏にある井戸でぬれた服を洗い、外に干した。
ハヌルはその間に、出かけて食べ物を買ってきたようだった。

日が暮れた。

ハヌルは突き上げ戸を閉めた。

テーブルの上にランプ。

暖炉にも小さく火が入っている。

熱くもなく、寒くもなく。

「実は、ベッドつてないんだよねえ」

ハヌルが食事を終えて言った。

「いつもこのテーブルの上に丸まって寝てたから・・・」

「あ・・・ええよ、私なら。」

床の上に寝るから」

「そういうわけにはいかないでしょ、お客さんだし」

と、言うわけで、二人でテーブルをベッドがわりに寝ることになった。

それくらいテーブルは大きかった。

マットも毛布も何もない。

寒くはなかった。

でも、寝るときもナイフを近くに置いてあるハヌルが気になった。

信じられないようなことがあり、不思議な出会いがあり、眠れないかと思った。

意外にも私の寝つきはよかった。

疲れていたのかもしれない。

横になって目を閉じたとたん眠りについたと思う。

どのくらい眠っただろう。

天井を叩く音がした。

こんこん。

石をぶつけるような、ノックするような音。

そして、声が聞こえる。

「ハヌル、ハヌル、起きてくれ」

昼間に来たナムの声だ。

「ナム？まだ夜中でしょ？どうした？」

ハヌルが答えた。

人嫌いというナム。

私は息を殺していた。

「コマの、娘の容態がひどくなってきたんだ。

指先も足先も感覚がなくなってきたって言うんだ。

ハヌル、薬を頼む。

疲れてるのは分かっているが、明日にでも行ってくれないか」

声が震えている。

コマというのが病気の娘の名前なのだろう。

哀願している姿が目には浮かぶようだ。

「分かった、ナム。

夜が明けたらすぐに行く。

今夜一晩だけ眠らせて」

「分かった。

ハヌル、すまない。

コマが、コマが死んでしまいそうなんだ」

ザワザワツと音がした後、静かになった。

ハヌルがため息を一つついた。

「起こしちやったね。

もう行ったみたいだから、ゆっくり寝て。

で、明日一緒に出かけよう」

「え？一緒に？」

聞き返したときには、すでにハヌルは寝息を立てていた。

薬草狩り 1

物音で目が覚めた。

天井が見えた。

木造……。

あれ……どこにいるんだっけ……。
体を起こした。

ログハウスだ。

窓は開けられ、明るい日差しと涼しい風が部屋の中に入ってきている。

昨日のことは夢ではなかった。

暖炉に向かうハヌルの背中が見えた。

「おはよ……」

「おはよ、いい天気だよ」

ハヌルが振り向いて答えた。

ケトルで湯を沸かしているようだった。

「朝ごはん、昨日のパンしかないよ」

湯の沸いたケトルを運んできてテーブルの上に置いた。

私はあわてて、テーブルから降りた。

ハヌルは昨日とは違う小箱から葉を取り出してケトルに入れた。

昨日のお茶とは違う香りがただよってきた。

「さ、食べちゃって。」

すぐ出かける準備しちゃうから」

ハヌルはパンの乗った皿を私の目の前に置いた。

「あ……ありがとう」

「今、お茶入れるからね」

ハヌルは昨日のカップをテーブルの上に置くと、今作ったお茶を注いだ。

昨日とは違う少し赤みを帯びた色をしたお茶だった。

「これはね、元気になるお茶」

ハヌルにすすめられて一口すする。

昨日の青いお茶とは違い、少し甘かった。

ハヌルはカップに注いだ残りのお茶を水筒に入れた。

私がお茶を飲みながら、パンをほおばってる間に、ハヌルは家を出たり入ったり、なにやら忙しげだった。

私は、食べ終わると、皿とカップを外の井戸のところへ持って行って洗い、家の中に戻った。

戻った私にハヌルが暖炉の火かき棒を差し出した。

とっさに受け取った。

「一応、持ってて」

「これを？」

「武器らしいものこのナイフ以外ないんだよねえ」

ハヌルが自分の腰に下げたナイフを指差しながら言った。

「武器?!」

「一応だよ、一応。」

私が守る!

……つもりだけど、いざとなったら自分で何とかして」

ハヌルは舌を出して笑うと、窓を閉めた。

玄関からの光だけで、部屋の中は真っ暗になった。

「さ、行こう」

ハヌルが私の手を引いて外へ出た。

「あ、あの・・・どこへ・・・何しに？」

「ナムの娘のために薬になる草を探しに行くって言わなかったっけ？」

「聞いたと思う・・・」

「どこへ行くかは、言っていなかったね」

昨日、私が流れ着いていた海岸に打ち上げられた海草の中に、薬になる薬草が混ざっているらしい。

「打ち上げられた海草相手に武器？」

私が火かき棒を見ながらたずねた。

「その火かき棒が役に立つかどうかは分からないけど・・・」

リンは格闘技の経験、ある？」

「まさか！」

「じゃあ、やっぱりそれ、持ってて」

ハヌルは私の前をどんどん歩いていく。

腰にはナイフと水筒。

私は火かき棒を片手にぶら下げて、ハヌルの後をついていった。

薬草狩り2

浜辺は明るく、風も心地よかった。

空は青く高く、海は少し緑みがかっていたが、とても澄んでいた。白い浜辺には海草が確かに打ち上げられている。

この中に薬草が混じっているということなのか…。

「この辺りのはもう何度も見たから。もつと向こうを探さなきゃ」

ハヌルは海岸線に沿ってどンドン歩いて行く。白い砂浜はどこまでも続いているようにみえた。私はハヌルの後をついて行くだけだった。

しばらく歩くと、ハヌルは立ち止まり、足下にある海草を次々と指でかき分けた。

私はただ、立っていた。

「あつた！」

ハヌルは小さな黒い玉を私に見せた。

直径5ミリ程度の、少し光沢のあるまん丸い玉だった。

「それが薬？」

私が尋ねると、ハヌルは海草の束を探りながら首を横に振った。

「これは薬草の種。」

発芽までは10年以上かかるって言われてる。

この種を蒔いたら、明日芽が出るかもしれないし、10年後かもしれない。

でも、種があるってことは本体もあるってこと」

絡み合った髪の毛のような海草の中から見つかった5ミリほどの玉。

私もしゃがんで、海草を掻き分けてみた。

「リン、気をつけてね」

ハヌルは私にそういうと、海草を掻き分け続けていた。

海草の中には薬草らしきものは見当たらない。

「薬草ってどんなの？」

聞こうとしたとき、海草が手に絡んできた。

まるで意思を持っていているかのように、腕に巻きついてきた。

払いのけようと、私はしりもちをついてしまった。

それでも海草は取れない。

そのまま腕を這い上がってくる。

「ハヌル！」

私は助けを求めた。

ハヌルはすぐに私のところに来て、海草をはがそうとしてくれた。それでも海草は私の腕から離れない。

離れないどころか締め付けてきた。

「い・・・いたい！」

思わず声が出た。

ほんの少ししかないように見えていた海草が私の手を、腕を覆い隠している。

肩の辺りまで迫ってきた。

「助けて、ハヌル」

自分ではどうしようもなかった。

ハヌルがナイフを取り出して海草の上から私の腕を切りつけた。

ナイフの刃は、私の肌には届かず、海草だけを切り裂いた。

切り裂かれた瞬間、海草が私の腕を締め付ける力が少し弱まった

気がした。

が、次の瞬間また締め付けてきた。

「ハヌル・・・助けて・・・」

海草のようなモノが私の首にまで届いた。

ハヌルはナイフを私の体にまとわりつくモノを何度も切りつけた。何度目かに、モノは私の体から離れた。

開放された私は激しく咳き込んだ。

「う・・・」

ハヌルのうめくような声が聞こえた。

見ると、私にまとわりついていたモノが今度はハヌルを締め付けている。

「ハヌル！」

私は両手でハヌルからモノを引き離そうとしたが、まるで皮膚の一部のように吸い付き、ハヌルの肌とモノの間に爪の先すら入れることができない。

ハヌルは手からナイフを落とした。

私はあわててそれを拾ったが、ハヌルのようにモノを切りつけることができない。

ハヌルまで傷つけてしまいそうで。

「あかん！」

ハヌルから離れて！」

私はモノに向かって心の底から叫んだ。

薬草狩り3

私の叫びが届いたのか、モノがハヌルから少し離れた気がした。ハヌルの体からモノが少し浮いたように見えた。

モノとハヌルの肌の間の隙間に指を入れることができた。引き剥がしてみようとした。

モノの力は強く簡単にははがれなかったが、肌とモノの間にナイフを入れ切り裂いた。

「貸して」

ハヌルが私からナイフを受け取り、自分でモノを切り裂いた。

ハヌルから離れたモノはいくつにも切り分けられたはずなのに、ひとつに塊り、海の中へ消えていった。

「今のは何？」

「今のは何？」

私とハヌルは同時に言った。

私がつねたのは当然、今のモノのこと。

「今のは、このあたりの海に住んでるミヨックってグエムル」

「グエムル？」

「妖怪と言おうか・・・怪物ってとこかな。」

で、今のは何？」

「何・・・て、ミヨックなんやろ？」

ハヌルがつねたのは、モノのことではなさそうだった。

「今、リンが叫んだら、ミヨックが離れたでしょ？」

あれが体についたら、毎回はがすのにはかなり苦労する。

なのにリンが叫んだら、ミヨックが体から離れた」

「何、って言われても・・・」

ハヌルが死んでまうって思ったから、助けて！って思って、つい、叫んだだけ」

「ふーん。」

声に反応するのかな・・・

ま、いいや。

あんなのがいるから気をつけて。

よく見ると海草とは色が違うから。

緑がちよつときれいなのがミヨック。

下手に触るとまたやられるよ」

「で・・・薬草はどんなん？」

「海草から生えてる透明なやつ。寄生してるっていうのかな」

ハヌルはしゃがんで次々と海草の塊りをつついて回った。

私は直接触るのが怖くて、火かき棒でかき回しながら探した。

何度かミヨックに触れてしまったらしく、火かき棒を上ってきたが、あわてて火かき棒を放すと、ミヨックも離れた。

ハヌルも何度か触ってしまったらしく、手に巻きついた瞬間ナイフで切り離していた。

日が高く上った。

種はいくつか見つかったが、肝心の本体はまったく見つからない。

「休憩しようか」

ハヌルが提案した。

私は、薬草を探す手を止めた。

「ちよつと待っててね」

ハヌルは私の横で靴と上着を脱いだ。

腰の水筒やウエストバッグを砂の上に下ろした。

ナイフを口にくわえるとそのまま海の中へ飛び込んでいった。

しばらくして戻ってきたときには顔くらいの大きさもある魚を一匹捕ってきた。

「大丈夫なん？」

私が尋ねた。

「何が？」

「さっきのミヨック、海の中に入っていったやん。」

海の中におるんちゃうん？」

「ああ。大丈夫。」

あいつらは、水の中じゃ力が出ないのか、襲ってこないから」

そう言いながら、浜辺に流れ着いた木切れを手際よく組んだ。

石でかまどのように覆い、木切れに火をつけると、うえに薄い石を乗せた。

火が大きくなる前に、ハヌルは手早く魚をさばいた。

おろした魚を石の上に置くと、気持ちいい音がしておいしそうな香りがし始めた。

薬草狩り4

魚を食べ終わると、私とハヌルはまた海草つつきを始めた。単純な作業だからか、思ったより疲れる。

目を凝らして透明の薬草を探すからか、目も疲れる。しゃがんでいるので足や腰も、疲れる。

時々伸びをして海に目をやる。

青い海はどこまで続いてるんだろう。

私の家まで？

一緒にいたはずの兄はどこへ？

私はここにいるのに、兄はどこへ行ってしまったのだろうか。

ボーっと海を見て休憩している私。

ハヌルは、ただ黙々と海草をつつきまわしていた。

もう一度大きく伸びをして、私も火かき棒で海草をつついてみる。二人で、少しずつ移動しながら同じことを繰り返していた。

日が傾いてきたが、見つからない。

気づくと、探し始めた場所から、かなり移動していた。

日が沈む前に、またハヌルが海の中に入って魚を捕ってきた。

貝も。

昼と同じようにかまどを作ると、魚と貝を焼いて、二人で食べた。食べ終わるころには日が沈んだ。

「今日はこのままここで寝るから」

ハヌルは調べ終わった海草を海に戻し、安全に眠れる場所を確保した。

「ハヌル、思ったんやけど・・・」
「ん？」

「ミヨックって、海の中では襲ってこんのやる？
それやったら、巻きついてきたら、海に飛び込んだら離れるんぢやうん？」

「リン！」

あんだ、頭いいね！
思いつかなかった！」

月が昇ってきた。

かなり目が疲れたらしい。

月が二つ見える。

海から離れた砂浜で私とハヌルは眠った。

次の日も同じことを繰り返した。

昼近くになって、目がしょぼついてきたころ、海草がよく見えなくなつた。

海草がぼやけて見える。

火かき棒でつつこうとして気づいた。

ぼやけて見えるのは目のせいじゃない。

海草を透明な何かが覆っていた。

そのせいでよく見えなかったのだ。

「ハヌル！」

私が呼ぶとハヌルが立ち上がってこっちを見た。

「もしかしたら、これちゃうん？」

「おお！正解！

二目で見つけられるなんて、すごい！」

ハヌルはナイフを使って透明な繊維のようなものを切り取った。それをウエストバッグから取り出した小さな袋に詰め込んだ。小さな袋はすぐにいっぱいになった。

「これだけあればいいと思う」

小さな袋に入るだけなので、それほど量はあるように思えなかったが、ハヌルが足りると言うなら足りるのだろう。

「帰ろうか」

ハヌルが小袋をウエストバッグにしまいながら笑顔で言った。

次の瞬間、私の両足に何かが巻きついた。ミヨックだ。

私が両足をとられて倒れこむのと同時に、ハヌルも倒れた。

ハヌルの足にも海草のようなミヨックが巻きついていて。

海に入れば離れるのだろうが、両足を縛られた状態で身動きが取れない。

ハヌルはナイフでミヨックを切っていた。

私は・・・火かき棒で自分の足を殴ってみた。

不思議なことに痛みを感じない。

ミヨックが衝撃を吸収してるのだろうか。

ミヨックを離そうと、自分の足を殴り続けた。

時々間違っ、自分のひざを殴ってしまい、涙がこぼれるほど痛い。

私の足に絡みついたミヨックとハヌルに巻きついたミヨックがお互いに惹かれあうように近づき、ひとつかたまりになった。

薬草狩り5

ミヨックはすでにひざの辺りまでを覆い尽くしていた。ハヌルを見やる余裕はないが、おそらく同じ状態になってると思えた。

もがけばもがくほど這い上がってくる気がする。這い上がってくると同時に締め付けてくる。

腰の辺りまでが覆われるのに、それほど時間を要しなかった。

私の考えが正しければ、海の中に入ればミヨックは離れるはずでも、転がって移動することすら不可能だった。

「だ・・・誰か助けて・・・！」
それだけ言うのが精一杯だった。

このままでは二人とも全身海草に覆われて死んでしまうかもしれない。

「こんなところで死ぬわけには行かん！
誰か助けて。」

兄さん、助けて！」
心の中でそう叫んだ。

とたんに、ミヨックの締め付けがゆるんだ。
指がミヨックと体の間に入った。

昨日、ハヌルが襲われたときと同じだ。
服を傷つけることを覚悟して、体とミヨックの間に火かき棒を差し込み、ミヨックを引きちぎった。

簡単にははがれなかったが、締め付けられることがなくなったので身動きが取れるようになった。

「リン！」

海へ！」

ハヌルはナイフを使って、すでにかなりミヨックをはがしていた。私はまだ両足がミヨックに覆われていた。立ち上がれなかった。

ハヌルはまだ片足が覆われてはいたが、私の手を引いて立たせてくれた。

何度か倒れながら、私たちは海へ飛び込んだ。溶けるようにミヨックが離れた。

ハヌルも私も肩で息をしていた。

ここのところ毎日「死ぬかもしれない」と思う瞬間が続いている。このままでは精神が持ちそうにない。

海から出ると、二人で白い砂浜に腰を下ろした。

ハヌルが水筒のお茶をすすめてくれた。

わずかな甘みが体を癒してくれる気がした。

『元気になるお茶』

ハヌルがそんなことを言っていた気がする。

「海に入ったら、ミヨックが離れることが実証されたね。

こんな簡単に離れるのが分かってたら、今まで苦労しなかったのに」

ハヌルがため息をひとつついた。

「いつもナイフで応戦？」

私がつねた。

「どれだけ必死でナイフを振り回すことか・・・」

その様子は、簡単に想像できた。

ミヨックの激しい締め付けは、死ぬかもしれないと思わせるに充分だった。

「でも・・・」

ハヌルがナイフを目の高さまで上げて続けた。

「今日も、途中でミヨックがひるんだ、っていつか・・・離れたよね。」

いつもかなり苦勞するのに、ミヨックの巻きつきが緩んだから、かなり楽だった。

もしかして・・・リン、何か叫んだ？」

「たぶん、声には出てなかったと思うけど・・・助けて、って心の中で叫んだ・・・と思う」

ハヌルはしばらく私を見つめたまま、黙り込んだ。

「いや。」

とりあえず目的は達した！

ナムに届けに行こう！」

ハヌルが立ち上がったもともと来たほうへ歩き始めた。

私も慌てて立ち上がった。

いろんな出来事のせいで、足が震えていたが、ハヌルに小走りについていった。

覚醒 1

前を歩くハヌルについて行った。

ひざが、ガクガクと震えているのがわかる。

ハヌルは、海岸から林に入ると、ログハウスの方とは違う道を進んだ。

進むにつれ、林というよりは、森というにふさわしい風景になってきた。

空が見えないほど木々の葉が茂っていた。

「ナム！ナム！」

ハヌルが立ち止まり、上を見上げながら叫んだ。

そういえば、ナムがハヌルに呼びかけるときはいつも天井あたりで、ノックの音が聞こえてたのを思い出した。

もしかして、ナムって空から降りてくるのだろうか。

そんなことを漠然と考えながらハヌルのそばで足を止めた。

「ナム！いないの？」

どこからも返事がない。

私は足の震えが止まらず、その場にしゃがみこんでしまった。

「ナムウ〜！」

薬が見つかったよ〜」

ハヌルがこれ以上ないって声で叫ぶと、頭の上の方の木々の葉がザワザワと音を立てた。

しばらくすると、上の方から声がした。
見上げてみたが、人の姿は見えない。

「その娘は…？」

ハヌルはチラッと私に目をやると、また顔を上げて答えた。

「この子はリン。」

この子なら大丈夫！

この子が草を見つけてくれたんだよ。」

また沈黙。

木々が動いた気がした。

私は地面に座り込んだまま高い木を見上げ、ナムなる人の姿を探してみた。

が、やっぱり見当たらない。

ハヌルが透明な薬草を入れた小袋を差し上げた。

私は目を疑った。

枝が揺れて、小袋を受け取った。

思わず居住まい正して正座して目を凝らした。

誰が枝を動かしたのだろう…？

小袋を受け取った枝とは別の枝が伸びてきて袋を開けた。

「おお…ありがとうございます、ハヌル、リン。」

確かにこれだ！

これでコマが助かる」

高いところから声がした。

もう一度人影を探してみた。

見つかった！

人ではなかった。

太い木の幹に丸いビー玉が、青いような黒いような緑のようなビ

「玉が二つ並んでこちらを見ていた。

眼？

そこが眼だとなると・・・その少し下に開いている穴が口？

私はかなり間抜けな顔をして見上げていた。

「ナムは木の・・・なんだろ・・・グエムル？」
ハヌルが言った。

「木の精と言つてほしいな」
ナムらしき木の、口らしき穴が答えた。

「早速コマに飲ませてくるよ」

小袋は枝から枝へリレーされて移動して行った。

それにあわせて、ナムが移動していった。

正確にはビー玉のような眼と穴のような口が他の木に移動していった。

眼と口が移動していくと、気の背が伸び、葉が生い茂った。

眼と口の移動に合わせ、木は背が伸び、背が縮み、葉が生い茂り、葉の数が減って・・・。

しゃべる木、ウエーブのように伸び縮みする木々。

初めて見た生き物、初めて見た光景なのに、不思議と恐怖は感じなかった。

木って生きてるんだ。

ただそう感じたただけだった。

「ナムもね、到着の浜辺に流れ着いたんだって。

ずっと昔だけどね」
ハヌルが教えてくれた。

覚醒2

「流れ着くのは人だけやないん？」

私は座ったままハヌルにたずねた。

「みたいだねえ。」

不定期だしね」

ハヌルも私の隣に座った。

ナムが去った後の『森』は、また『林』に戻った。

木々の間から空が見える。

いい天気だ。

ハヌルと私は、その場に横になった。

「ナムは人を信用してないって言うてたやん？
なんかあつたん？」

私がたずねた。

ハヌルの説明によると、ナムの娘のコマはナムのように木から木へ移ることができない。

まだ『体』を持つている。

木の精の根は不老不死の薬になるといわれていて、コマの根を切った人がいた。

木なので、そのうち再生されるとは言うものの、根を切られたときの激痛は、足を切り落とされたに等しいらしい。

そして、コマの場合は、切り取られた量が多く、そのうえ切り取られた部分から腐り始めたというのだ。

ザワザワと葉が音を立て、林がまた森になった。

ナムが戻ってきたらしい。

「ハヌル、リン、ありがとう。」

「コマは落ち着いて眠ったよ。」

ナムのビー玉のような眼が優しく光っているように見えた。

「そうか。」

「よかった。」

ハヌルは安心したように言った。

「ナム、ミヨックのこと分かる？」

「続けてハヌルはたずねた。」

「詳しくは分からない。」

「リンが叫ぶと、ミヨックが体から少し離れるんだけど、なんでだろ。」

「リンが叫ぶと？」

ナムの眼が私を見つめてる気がした。

「なんだか気まずくて、私は座りなおした。」

「私が叫ぼうがわめこうが、ミヨックは締め付けてくるのに、リンが叫ぶとゆるんだんだ。」

「2回だけだったから偶然かもしれないんだけどね。」

でも、2回叫んで2回ともゆるむって、なんかあるのかな、って思ってた。」

「声の・・・波長・・・？」

「私が言った。」

ハヌルの声は私の声より少し低い。

「私の金切り声に反応したのかもしいれない・・・と。」

「ミヨックに耳があるとは思えないし・・・」

「一度は心の中で叫んだって言ってなかったっけ。」

ハヌルがそういうのが聞こえたと思ったたとたん、一本の枝がする

すると私に向かって伸びてきた。

声を出すまもなく、私の体に巻きついた。

あっという間に、私の体は高く持ち上げられた。

「ナム！何をするの！」

ハヌルが下で叫んでいるのが聞こえる。

私は締め付けられて、苦しくて声が出ない。

「や……やめて、ナム。」

苦しい……」

私は声を振り絞ったつもりだったが、空気のような声が出ただけだった。

両腕も体と一緒に枝が締め付けてくる。

足をばたばたさせたところで、何の効果もない。

そのうち、本当に息ができなくなってきた。

覚醒3

「やめて！助けて！」

私は叫んだ。

実際は声にならず、心の中で叫んだだけだった。

次の瞬間、私を締め付けていた枝がゆるみ、枝から抜け、私の体は落下した。

地面に落ちる前に、別の枝が私を受け止めてくれた。

「ナム！一体どういうつもり！」

リンは信用できるって言っただでしょ！」

ハヌルが本気で怒っている。

私を受け止めてくれた枝は、私をやさしく地面に降ろしてくれた。

私は苦しくて咳き込んだ。

「リン、悪かった。」

ハヌル、この子には力がある」

ナムの眼は、少し鋭くなったように見えた。

「力？なんの！」

ハヌルはまだ興奮していた。

私はハヌルの足元に崩れるように座り込んだ。

「ハヌル、リンは自分を守る力を持っている。自分だけじゃない。」

ミヨックがハヌルから離れたということは、自分の周りの人も助ける力を持っている」

ナムが何を言ってるのか私には理解できなかった。
私を守る？自分を？人を？

「リンを握り締めていたが、すごい力で押し戻され、リンを落と
してしまった」

ナムが、そう説明した。

「うまく説明できないが、リンが心から願ったとき、体が、リン
の体が何かに守られる。」

そういう力を持った人間がいると聞いたことがある」

ナムは何百年と生きている。

何年前か、何十年前か、何百年前かにそういう人間のうわさを聞
いたことがあるらしい。

私にそんな力があるとは思えない。

「リン」

ナムが私に話しかけてきた。

「今まで自分の力に気づかなかったのか？」

「今までも何も・・・今もそんな力があるなんて思えへんよ」
私は正直に答えた。

「ここにたどり着いて、力が目覚めたのかもしれない」
ハヌルが言った。

「私もね、ここに来るまでナイフなんて持ったことなかった。
果物ナイフすらね。」

でも、ここにたどり着いて、誰に教わったわけでもないのに、ナ
イフで闘える自分に気づいた」

「ナイフで闘う？」

私が聞き返した。

ナイフで闘う場面がそんなにもあるのだろうか……。

「ここはナムが守ってくれてるから平和だけど、林を出るとい
んなのがいるから」

ハヌルが意味ありげに言った。

「目覚めたばかりの力が……」

ナムが言った。

「まだ、自分で力をコントロールできないかもしれないな。
どんなときにどんな力が出るか、未知数ってところだ」

「もつとすごい力があるかもしれないし」

ハヌルが私を見た。

「もしかしたらこれで終わりかもしれないか？」

「未知数だな」

ナムとハヌルの会話を聞きながら頭が痛くなってきた。

飛行機から落ちて、不思議な海草に襲われて、平然と木と話をし
て……。

そのうえ、私になにやら力が目覚めた……？

頭がおかしくなりそうだった。

覚醒4

「ちょっと休んでもええやろか。
なんか・・・わけわからんから、頭痛くなってきた」
私は両手で頭を押さえた。

「お茶、持ってきてるから飲む？」
ハヌルは私に水筒を差し出した。

「いや・・・ちょっと横になりたいかも」
私はこめかみを押さえながら言った。

「家に戻ろうか」
ハヌルが立ち上がって、私に手を差し伸べた。
その手を握って、私は立ち上がった。

「帰る前に、礼がしたい」
ナムがバサバサと揺れた。

ドサツ

何かが落ちてきた。
小さな、でも重そうな袋だった。
ハヌルが袋の口をあけて中を覗き込んだ。

「ナム！
これ、どうしたの？
金貨じゃないの？」

ハヌルが驚いて言った。

「いつだったか、何かの礼でもらったものだ」

ナムが答えて、またバサバサと揺れると、また落ちてきた。同じような小さな、でも重そうな袋。

「受け取ってくれ」

「こんなにたくさんいいよ。」

この中から4枚も金貨をもらえば十分」

ハヌルが袋の中から金貨を4枚抜いて、袋の口を閉めた。

「コマの恩人だ。」

これだけでは足りない。

気持ちだ。

受け取ってもらえないと、気がすまない」

「じゃあ・・・お言葉に甘えて、一袋もらっつ。」

それ以上は受け取れないからね。

ありがとう、ナム！

行こう、リン」

ハヌルは袋をひとつだけ受け取ると、私の手を引いてその場を離れた。

一袋は足元に残したまま。

「ハヌル！リン！

ありがとう！」

ナムの声が後ろから聞こえた。

「金貨って初めて見た」

と、私が言うと、ハヌルは袋から金貨を数枚抜くと、金貨の残った袋を私に差し出した。

「報酬は半分ずつね。
これ、リンの分」

「え？」

ええよ。私はなんもしてないし」

「何言ってるの。」

薬見つけたし、助けてくれたし。

私が半分もらってほうが申し訳ないじゃない」

ハヌルは抜き取った金貨をパンツのポケットに入れた。

ハヌルから袋を受け取った。

思ったより重い。

ハヌルについていきながら、袋から一枚金貨を出してみた。
木漏れ日にきらきらと輝いていた。

まもなく、ハヌルのログハウスに着いた。

部屋に入り、私が窓を開けてる間に、ハヌルはカップをテーブルに置いた。

腰の水筒をはずすと

「赤いお茶と青いお茶、どっちにする？」
とたずねてきた。

赤いお茶の方が甘くておいしいのだが、なぜかそのときは青いお茶が飲みたかった。

「青いほうがほしいかな」

ハヌルはカップのひとつに水筒から青いお茶を注いだ。

水筒の向きを変えるてもう片方に注ぐと、今度は赤いお茶が出た。

ひとつの水筒に2種類入っているらしい。
青いお茶を私の前に差し出すと、ハヌルは赤いほうのお茶を飲んだ。

ハヌルから受け取った青いお茶を飲んだ。
冷めていたからか、あまり酸味を感じず、飲みやすかった。
飲んだお茶が体中に広がる気がした。

頭がすっきりとした。
気持ちが悪くお茶というのは正解だ。

「さ、出かけよう！」
ハヌルが立ち上がった。

「え？今から？」
ちよつと休まんの？」
頭はすっきりしてきたが、体がだるい。

ハヌルは自分のカップを私に差し出した。
お茶はほとんど残っていなかったが、そこに水筒から赤いお茶を
足した。

「これ飲んだら元気になるよ」
差し出されるまま、赤いお茶を飲んだ。
冷めていても、やっぱりほんのりと甘い。
青いのを飲んだときと同じように、お茶が全身に広がるのを感じ
た。

確かに、だるさが少しましになった気がする。

ふー

ゆっくり息を吐くと、もうなんともないくらい体が楽になった。

私がお茶を飲んでいる間に、ハヌルはゴソゴソとチェストの中から何かを出してきた。

リュックだった。

背中にリュックを背負うと

「買い物に行こう！」

と、私を誘った。

町1

「え？」

もうちょっとだけ休ませて」

私はカップに残ったお茶を飲み干した。

「日が暮れるまでに戻らないと大変なことになるからさ。

今のうちに出かけよう」

ハヌルはそういうと玄関のドアを押さえて、私が立ち上がるのを待っていた。

「買い物つてどこまで？」

「遠いん？」

私はカップをテーブルの上に置いた。

「すぐ、すぐ。」

「さ、行こう」

思ったより体が軽い。

疲れがほとんどない。

お茶のおかげ？

いったいお茶の成分は何なんだろう。

到着の浜辺へ行く道とは反対方向にハヌルが歩いていった。

背中にリュック。

腰に水筒とナイフ。

まもなく林が途切れ、小さな花があちこちに咲く草原に出た。
赤い花、青い花、白い花。

ところどころに背の低い木も立っている。

そして・・・犬？狼？

5メートルと離れていないところに動物の影。

犬が苦手な私は足を止めた。

ハヌルは少し前まで行って、私が立ち止まったことに気づいて振り返った。

「どうしたの？」

「犬・・・苦手・・・」

ハヌルは戻ってきて私の手を引いた。

「大丈夫。」

この子達は夜行性だし、何もしなければ襲ってきたりしないからおとなしい子達だよ」

そういうハヌルの手に腰に下げていたはずのナイフが握られていた。

「でもハヌル、そのナイフは・・・？」

「これ？」

これはこの子達相手じゃなくて・・・」

ハヌルはきよるきよると見回して、左の遠くのほうを指差した。

「あれが見える？」

ハヌルの指差した先50メートルくらいのところに、何か小さな藪のようなものが見えた。

「あれは注意してね。」

あれが近づいてきたら動いちゃだめ。

じっとしてやり過ぎず。

こっちが動いてるのみつけると襲ってくるから」

ハヌルが事も無げに言った。

「襲ってくるん・・・？」

私はハヌルの手を強く握ってしまった。

「あいつは眼が悪いから、これくらいの距離なら大丈夫。さ、行こう。」

町はすぐそこだから」

私は周りの犬たちに警戒しつつ、遠くの、襲ってくるという藪を警戒しつつ、ハヌルに引つ張られるように歩いた。

すぐ前方に大きな木の壁が見えた。

町を高い壁が囲っているようだ。

大きな門が見えた。

観音開きの門の片方に小さな扉がついていた。

ハヌルはそのドアの隙間にナイフを差し込んで上にあげ、それからドアを引いて開けた。

「さ、入って」

ハヌルに促されて中に入った。

私が入ると、ハヌルは扉に掛け金をかけた。

もつと人が多いのかと思っていた。

ひっそりとした町だった。

しかし、きちんと区画整理がなされ、きれいに整った町だった。

建物はどれも、ハヌルの家と似たようなログハウスだった。

大きさが多少違ったり、店には看板が掲げてあったり。

門を入ってすぐのところにある小屋から人が出てきた。

・・・

・・・人・・・？

私は眼を疑った。

二本足で立ち、服を着ているが、顔は人とは言いがたかった。

耳は頭の上であり、丸い顔中毛が生えていて、長いひげが左右に
数本伸び・・・。

猫？

町2

「やあ、ハヌル」

猫がしゃべった。

木がしゃべる世界だから、猫がしゃべっても不思議はないのかも
しれない。

「コヤギ、今日もひげが輝いてるね」

ハヌルは軽く挨拶をして町の中へ進んだ。

私はコヤギという猫が気になったが、ハヌルについていった。

「まずは・・・食料！」

それから、服かな。

後は・・・後で考えよう！」

ハヌルは一番近くの店に入った。

私もついて入れた。

食料品店のようだった。

いくつか並んだ食材の中からハヌルは適当に選び、買った。

その店主ともハヌルは挨拶を交わした。

そして、その店主も・・・猫だった。

次に入ったのは服屋。

ハヌルは、赤いフード付きのジャケットを私のために選んでくれ
た。

そしてやっぱり、その店主も猫だった。

ここは猫の町？

次に入った店は刃物を売っていた。

「このナイフよりもうちょっと長いのがほしいんだけど」
ハヌルは腰のナイフを猫の店主に見せた。

「ほう、もうそれでは物足りなくなっただか？」

店主は棚から箱を取り出した。

「これならどうだ？」

ハヌルなら扱えると思うが」

ハヌルが箱から取り出したのは、ナイフというよりは、剣と呼ばれるにふさわしい長さの物だった。

さやから抜くと、銀色の輝く刃の光が冷たかった。

「強力？」

ハヌルがたずねた。

「かなりな」

店主が別の箱を取り出しながら言った。

「こっちは女性向けだが、そっちの子にどうだ？」

と、私の方を見ながら言った。

「女性向けのを私にはすすめないで？」

ハヌルはそう言いながら、後から店主が出してきた箱から剣を取り出した。

長さはあるが、細身の軽そうな剣だった。

ハヌルは剣を抜いて、軽く振ってみた。

「すごく軽いね。」

軽くて、振り回すには楽だけど・・・」

ハヌルが物足りなさそうに剣をさやに戻した。

「威力がないから、ハヌルの好みではないだろ？」

店主はさやに入ったままの剣を私に差し出した。

「私に？」

ハヌルが軽いといった剣は、私には重く感じた。
見た目よりは軽いのかもしいれないが、ハヌルみたいに振り回せる
とは思えなかった。

「どう？」

ハヌルと店主が私の顔を覗き込んだ。

「うーん……。」

扱えそうな気が……せん」

私は剣を鞘から出すこともなく店主に返した。

「そうか。」

これより軽いのになると……。」

店主が背を向けて別の箱を取ろうとした。

「あ……いや……。」

どんなにしる、ナイフや剣は私には無理や」

「そう？」

でも、武器も持たずに町の外に住むのは危険だぞ」

店主はゴソゴソと何か別のものを出そうとしていた。

「大丈夫。」

この子は私が守る！」

ハヌルが私の肩に手を置いて言った。

「でも実際はこの子が私を守ってくれてるんだけどね」

「ほう？」

店主は手を止めて私を見た。

「剣を使わずに守るって、格闘家か？」

「ナムが言うには、自分や周りの人を守る力があるかもしれない
って」

ハヌルが説明すると、店主はまたしゃがんでゴソゴソと探し始めた。

さっきとは違う色の箱を取り出した。

「永いことしまいこんでいたが、使う時が来たかな。

人を守る力となると・・・これが使えるかもしれない」

店主が箱をあけて見せたのは、50センチくらいの木切れだった。

町3

「これ、何？」

ハヌルが箱から木切れを出してたずねた。

「うわ……。」

見た目よりずいぶん重い。

リンに扱える？」

「ハヌルには重いだろうが……ちよつと持ってごらん」

店主が私に言った。

ハヌルから木切れを受け取った。

ん？

これが重い？

「全然重くないけど……？」

そこらの小枝と変わらんよ」

私が言つとハヌルが驚いた。

「えー。なんで？」

見た目よりかなり重いよ？」

「やっぱり」

店主が私から木切れを受け取ると箱にしまい、別の箱を出した。

「さっきのが小枝程度なら、これならどうだ？」

次に出してきたのは、先ほどのより少しきれいに削られたものだった。

木製で長さは同じ50センチくらい。

片方が細く、片方が少し太く。

太くなつた先に小さな青い石が入れてあつた。

私が細いほうを持って箱から出した。

「ああ、違う。」

この太くなつたほうを持つんだ」

言われて持ち直した。

重くはない。

軽すぎることもなく、手にあつた。

「いい感じかも」

私がそついうと店主は満足げな顔をした。

「この子には魔法使いの素質がありそうだ」

「魔法使い？」

私とハヌルが同時に声を出した。

「この商売を親父から引き継いでからまだ一度もお目にかかったことがないんだが。」

剣は扱えないが、ロッドで闘う種しゅがいると聞いたことがある」

「これで殴る？」

突く？」

ハヌルがロッドを指差しながら尋ねた。

「そんなことをしたら折れてしまう。」

これは水系の魔法用のロッドだが・・・得意か？」

店主に聞かれた。

私は首を横に激しく振った。

「火の方が得意か？」

店主に聞かれて、また私は激しく首を横に振った。

「土系？」

聞かれてまた首を振った。

「後は・・・何があつたっけか・・・。

得意なのはどの系統だ？」

店主に聞かれたが、私には店主の言う水系、火系、土系というのが何を意味してるのか分からない。

「ナムが言うには」

ハヌルが私の代わりに答えた。

「まだ目覚めたばかりで、力をコントロールできないんじゃないかって。」

どのくらいの力があるかも分からないって」

首をかしげている私を見て店主は別のロッドを出した。

「守る力があることだけは確かなんだな。

じゃ、とりあえずこれを使ってみてくれ」

店主が箱から取り出したのはさつきと長さも形も同じだったが、青い石の変わりにきらきらか輝く透明の石がついていた。

「これは万能だけど、どれもそれなりに、ってやつ。持ってみて」

店主に渡されたロッドは、青い石がついたのと同じくらい手に合った。

「持った感じは悪くないけど・・・」

「けど・・・？」

「どうやって使えばいいのか分からない・・・」

と、私は、ロッドを店主に返した。

「まだ力が思うように使えないか・・・。
どうやって力を出すのかってことは、私にはわからないからな。
とりあえず、手に持ってたらなんとかなるんじゃないか」
店主はロッドを箱に戻すと、私に箱ごと差し出した。

とりあえずなんとかなる？
大丈夫なのか？そんなことで・・・

町4

「確か、コヤギの知り合いに魔法使いがいたはずだ。

一度訪ねてみるのがいいかもしれない」

店主が言った。

コヤギとは、町に入っすぐのところ出会った猫だ。

「そうしてみる。

じゃ、今回はこの剣とロッドをもらうね」

ハヌルが金貨を渡した。

「ロッドの箱は要らないから、ベルトをサービスしてよ」

ハヌルが言うと、店主はロッドを箱から出して、布製のベルトと一緒にカウンターに置いた。

ハヌルは私の腰に手を回すとベルトをつけてくれ、ベルトにロッドを差し込んだ。

62

「ありがとう、オヤジさん。

コヤギに魔法使いのこと、聞いてみるよ」

そう言ってハヌルが店を出たので、私も猫に軽く会釈をしてハヌルの後を追った。

「さっきの人・・・男なんや」

私が言った。

「ん？」

「性別。

見たため声も区別つかんかってん。

ハヌルが『オヤジさん』って言ったから、男なんやあ、って」

「ああ、分かりにくいかもしれないね。
さっきの食料品店の人は女だったしね」

「あ、ロツドの代金。」

私のためのもんやし、私も金貨もらったし。
私が払うわ。

服代も」

ポケットから金貨を出して、ハヌルに渡そうとした。

「いいよ。」

ミヨツクから助けてくれたお礼ってことで。

次はなにかおごってもらうから」

ハヌルはさつさと前を歩いていく。

私は今回は言葉に甘えることにした。

金貨をポケットに戻してハヌルの後について行った。

「コヤギんところに行くよ」

ハヌルと一緒に、町の入り口まで戻った。

門の近くの小屋には誰もいなかった。

「コヤギ・・・またサボってるな」

ハヌルはきびすを返すと町の中心の方に戻った。

「コヤギは、警備兵なんだけど・・・すぐどこか行っちゃうだよ
ねえ。」

どこへ行ったのやら・・・」ハヌルは一軒一軒店を覗いて回った。

どこの店も猫。

毛足が長かったり、毛の色が多少違ってたり…

でも、私には区別がつけにくかった。
色の違い以外分からなかった。
ましてや性別など…

ハヌルは店を覗く度に、猫たちに声をかけた。
コヤギの行方を聞いたり、世間話だったり。

そのうちの何人（何匹）かに私のことを尋ねられ、そのたびにハヌルは

「リンっていうんだけど、私の友達だからこれから良くしてやってね」

と答えた。

私はただ会釈するだけだった。

表に『準備中』の札がかかった一軒の酒場。

が、コヤギは準備中の酒場のカウンターにいた。

「コヤギ！

まだ昼過ぎだっていうのに飲んでるの？」

ハヌルに呼ばれ、振り向いたコヤギは…酔ってるのかシラフなのか、毛だらけの顔を見ても私には判断できなかった。

「ん？

なんだ、ハヌルか」

答えたコヤギの声を聞くかぎり、まだ酔ってはいないようだった。

「ハヌルちゃん、言ってやってよ。

「ここんとこ毎日この時間に来て飲んでんのよ」

この店主は口調から女だと思われる。

「だってこの時間に襲ってくるグエムルはこのへんにはいないよ。
一晩中警備してなきゃならないんだから、この時間にしか飲めないんだし」

コヤギは手に持ったグラスを一気にあけた。

「こっちは商売だし、売上げに貢献してくれるのはありがたいんだけど、連日となると、なんかあった時に責任感じちゃうよ」

「そういうことは、なんかあってから言えよ。

このくらい飲んだってなんの影響もないさ。

それより、おかわりとおつまみ。

ハヌルも飲む？」

町5

「せつかくだけど、私は飲めないから。
ところで、聞きたいことがあるんだけど」

「俺に？」

コヤギは空になったグラスを店主に渡しながら言った。

「魔法使いの知り合いがいるって聞いたんだけど。
紹介してほしいんだ」

「魔法使い？」

ハヌルの問いかけに、コヤギは口に持っていたこうとしたグラスを
カウンターに置いた。

「会いたいのか？
なぜ？」

「実は、このリンに魔法使いの素質があるらしいんだけど、まだ
思うように使えなくて。

色々教えてもらえないかと」

ハヌルがいうと、コヤギはグラスから手を放し、スツールから降
りた。

「教えるって言ってもなあ・・・。

魔法なんて願ったらそのとおりになるだけで、コツも何も、特に
ないからなあ」

コヤギは私を上から下までゆっくりと見ながら、近づいてきた。

「リン・・・だっけ。
どの程度使えるんだ？」
コヤギが私の周りをゆっくり回った。

「まったく・・・」
私はコヤギが私の周りを回るのにあわせて体の向きを変えた。

「まだ力があるのが分かったばかりで。
ミヨックに襲われたときに、リンが叫んだら、ミヨックが体から
離れたんだ。」

自分を守る力があるみたい、それくらいしか分からなくて」
ハヌルが、私の代わりに説明してくれた。

「プロテクトかな」
コヤギは回るのをやめて、またカウンターに戻った。

「プロテクト？」
私がおうむ返しに聞いた。

「自分を守る力、かな。
自分の体の回りにオーラを出して、ある程度の攻撃を防ぐんだ」

「それで・・・コヤギ。
その魔法使いを紹介してほしいんだけど」
ハヌルが続けた。

「知り合いに魔法使いはいないよ」
コヤギは置いていたグラスを手にした。

「武器屋の親父の勘違いか・・・」

ハヌルが肩を落とした。

「ちよつとした勘違いだな」

「コヤギはグラスの酒を一口飲んで続けた」

「知り合いに魔法使いはいないが、俺が魔法使いだ」

「え?!」

「そうだったの?」

「全然知らなかった」

私も驚いたが、ハヌルはもちろん私以上に驚いたようだった。

「別に魔法使いかそうじゃないか、言ってみることもないしな」

「コヤギはつまみに出された・・・煮干か?・・・何かをつまんで言った。」

「それに、ありがたいことにこの町は平和だから、魔法を使う機会もなかったし。」

「俺の魔法は攻撃がメインだから、平和な町ではほとんど役立たずだからなあ」

「知らなかったわ・・・。」

「コヤギ、魔法使いだったの?」

店主が両手を胸の前で組んで言った。

「ね、ね、何かして見せてよ」

「俺のは攻撃魔法だよ?」

「下手に使ったら、この店、飛ぶよ?」

「コヤギはそっぴいなながらグラスをカウンターの上に置くと一歩下がった。」

右手の人差し指を立てると、グラスに向かって軽く振り下ろした。

ポッ

グラスの酒に火がついた。

「まあ！

すごい！

ねえねえ、これってファイアって魔法でしょ？

何かで読んだことあるわ！」

店主は興奮状態だった。

私は店主ほど興奮できなかった。
興奮より不安の方が大きかった。

町6

コヤギのような魔法が私にも使えるのだろうか。
ハヌルやナムは私が魔法使いだと確信している。
まだ、力が使いきれないだけだと。

でも、実際そんな力が私にあるのだろうか。
今まで生きてきた中で、自分に魔法が使えたら、と思ったことは
何度もあった。

子供のころテレビを見ながら、いつか魔法使いになるんだ、そう
思ったこともあった。

でも実際は、そんなことは無理だと大人になったら十分理解して
いたことだった。

それがある日、魔法使いの素質があると言われた。
魔法使いっていう存在すら信じがたい。

そう思う反面、ここでは、この世界では何でもありかもしれない、
そう思えるのも事実だった。

ただ、自分が魔法使いとしての力が十分あるのかどうか・・・。
ハヌルやナムの期待を裏切ることになるのでは？
そう思うと不安が心の中でどんどん大きくなっていった。

「ねえねえ、どうやってたらそんなことができるようになるの？」
私が聞いたかったことを、店主が代わりに聞いてくれた。

「最初は無我夢中のうちにできた、って感じだったなあ。
襲われたときに、『燃えちまえ！』って思ったら火が出た、って
感じかな。

そのうちだんだん思うような火を出せるようになった」

コヤギはグラスをあけた。

そういえば、助けて、って心の底から願ったとき、変な海草が体から離れた気がする。

「燃える！ってやってみる？」

コヤギが私の前に、つまみの乗った皿を差し出した。

「できるかな・・・」

私は心の中で念じてみた。

燃える。

燃える。

燃える。

かなり強く願ったつもりだったが、まったく火が出る様子はない。

「リン、ロッド！

さっきのロッドを手に持ってやってみたら？」

ハヌルが提案した。

「無駄、無駄」

コヤギがグラスを傾けながら言った。

「ロッドは力を増幅させる力があるんだ。

使えない魔法を使えるようにするものじゃないからね。

念じても火は出ないよ。

火が出て、燃えてるところを想像して、心の奥底から願うんだ」

コヤギの言うとおりやってみた。

皿の上に火が立ち昇り、赤々と燃える、そんな場面を想像してみた。

結果は同じだった。
何の変化もない。

「まあ・・・いざとなったらできるようになるかもしれないな」
コヤギが火のつかなかったつまみを取った。

「切羽詰ったら力が出るかもしれないから。
グエムルが現れたら戦ってみることだ。
でもロッドで殴るな。
折れるぞ」

私はコヤギの言葉にうなづいて見せたが、グエムルと戦うのか？
この私が？

できればそんなシーンは避けたい。

武器と呼べるものはロッドしかない。

でもそれで殴るなど？

では素手で戦うのか？

それとも・・・火かき棒？

「そつだ、これをやるよ」

コヤギが自分の腰に下げているものはずした。

戦闘 1

片方が太くなった棒だった。
こん棒？

「これなら殴っても折れない」
コヤギがこん棒を振り下ろして殴る振りをしてから私に渡した。

受け取ってみると、見た目より重い。

「これで殴るん？」
私にできるかなあ」
重いので当たれば痛いだろうが、腕の力が尽きそうだ。

「ロッドみたいに魔法を増幅させたりできないけど、剣みたいに魔法を妨害したりしない」

コヤギが説明した。

「剣が魔法を妨害するの?!」
ハヌルが意外そうに聞き返した。

「たぶん、その子が剣を持つとすごく重く感じると思うよ」
コヤギが言った。

私はさっきの店で持った剣のことを思い出した。
ハヌルには軽い剣が、私には重かった。

「じゃ、早速いきますか、リン」
ハヌルが店を出て行くとした。

「どこへ?」

こん棒をベルトに挿そうとしたが、ロッドが入っていると無理なようなので手に持ったままハヌルについて行った。

「表の犬たちを相手にしに！」

コヤギ、町から出るから、鍵掛けに来て」

「おう」

コヤギは私に続いて店を出た。

ハヌルが町を囲っている塀にある門を開けた。

私とハヌルが出た後、掛け金のしまる音がした。門番のコヤギが閉めてくれたのだらう。

「この子達は、又ツテって呼ばれてるんだけど、こっちから仕掛けない限り襲ってこないからね」

ハヌルは町の外にいる犬たちを指差して言った。

私が黙っていると

「どうしたの？」

とハヌルが聞いてきた。

「どうした・・・って？」

私がハヌルを見ると、ハヌルは微笑んでいた。

「さあ、どうぞ」

ハヌルが笑いながら手のひらを上に向けて、犬のほうをさして言った。

「え？」

「・・・え・・・？」

「えーっ?!」

もしかしたら、私に戦えと言ってる？
ハヌルはただ黙って微笑んでいた。

「犬、苦手や言っただやん！
無理やっつて！」

こんなんで殴るやなんて、無理無理！」
私は抵抗しようとしたけど、ハヌルはただ黙って微笑み続けた。

「犬、怖いのに・・・」
私はこん棒を握り締めて首を横に振った。

「リン、往生際が悪い！
行け！」

ハヌルは笑いながらも、私に出撃命令を出した。

仕方なく、私は一番近くにいた犬に一步近づいた。
犬はこちらを見る様子もなく寝そべっている。

もう一步近づいてみた。
犬は顔を上げてこちらを見た。
私の足はすくんだ。

「大丈夫。
又ツテたちはこっちが触らない限り攻撃してこないから。
髪の毛一本つて距離まで近づいても何にもしてこないから」
ハヌルが後ろで言った。

私は、ハヌルをチラッと見てから、また眼を犬に戻して、また一步近づいた。

一歩。

一歩。

一歩。

手を伸ばせば触れそうな距離にまで犬に近づいた。

「こん棒で殴って！」

ハヌルが後ろで叫んでいる。

「え？」

何もしてこおへん犬を殴るん？」

私はハヌルを振り返った。

ハヌルはうなづいている。

戦闘2

「何も悪いことしてへんやん・・・」

いくら犬が嫌いだといつても、何もしてこない犬を殴るなんてことはできなかった。

「殴ったら怒って襲ってくるし、下手したら死んでまうかもしれんやん」

「倒さなきや。」

夜になるとこの子らは豹変するんだよ。

この子らがいる限り、町はずっと門を閉ざして、自由に出入りできないんだよ？」

ハヌルが言った。

「だからって・・・無駄な殺生せんでもええやん」

私は目の前に寝そべる犬を見下ろして言った。

「無駄とも言い切れないよ。」

その子たちは食料になるからね」

ハヌルはウインクして見せた。

「食べるん?!」

私は改めて犬を見下ろした。

「ここじゃ食料は自給自足が原則。」

店で買えるものもあるけど、買えないものもある。

町には畑があるから野菜は売ってる。

でも、こういう動物は私たちが捕って町に売りに行ったりするんだ。

だから、がんばれ〜」

どこまで本当なのだろう、と思えるようなハヌルの言い方。

「あかん。

私にはできません。

何もしてないのに殴れんよ」

私の声はどんどん小さく消え入りそうだった。

「食料調達！」

ハヌルが叫んだ。

私は心を決めて目をつぶってこん棒を振り下ろした。

ギャン！

犬の悲鳴が聞こえた。

急所ははずしたらしい。

眼を開けると、犬が牙をむいて飛び掛ってきた。

大きな赤い口。

鋭い牙。

黄色い眼。

太い前足。

とがった爪。

殺される！

そう思って必死でこん棒を振り回した。

当たったかもしれない、当たらなかったかもしれない。

ただ、犬の牙が私の腕をかすったのは分かった。

「助けて！」

私は何かが犬を貫いてくれる瞬間を想像した。
意識したわけではなかった。

何かが犬を貫いて、そのまま地面に釘を打ったようにとどまって
くれたら！

ドーン！

まぶしい光と一緒に大きな音がした。
私は後ろに弾き飛ばされた。

「リン！」

ハヌルが駆け寄ってきた。

私はしりもちをついた。

犬も同じように弾かれたようだった。

私と同じように倒れている。

息はあるようだったが、立ち上がれないようだった。

ハヌルは私が無事なのを確認すると、剣で犬の首を飛ばした。

私は思わず目を閉じた。

不思議なことに首を切られた犬からは一滴の血も出なかった。

「大丈夫、リン？」

「どうやったの？」

倒れたままの私にハヌルが手をさし出して立たせてくれた。

「どうやったも何も・・・何があつたん？」

何が起こったか、ようわかってない」

私はズボンのすそやお尻をはたきながらハヌルに尋ねた。

ハヌルの話によると、私が犬を殴る。

犬が私に飛び掛ってくる。

私がこん棒をやたらめったら振り回す。

私が倒れそうになったとき、犬に雷が落ちたらしい。

「今の雷、リンがやったの？」

ハヌルの興奮が伝わってくる。

戦闘3

「私が？」

まさか」

「もう一回やってみて。

次のヌツテも雷でやって」

ハヌルに言われたけど、私にはどうすればいいのかわからない。

さっきと同じように空から何かを貫くところを想像してみたが、何も起こらない。

「あかんみたい。

何もならんわ」

私が言うつと、ハヌルは私の腰を指差した。

「こん棒だからじゃない？」

ロツドに持ち替えてみて」

ハヌルの提案どおり、ロツドとこん棒を持ち替えて、もう一度想像してみた。

さっきと同じように。

やっぱり何も起きない。

さっきのは偶然雷が落ちただけで、私がしたことじゃないのかも
しれない。

やっぱり私にはそんな力なんてないんだ。

ハヌル、ナム、期待はずれでごめん。

コヤギ、色々話してくれたのにごめん。

ああ・・・情けない。

「雷！落ちろ！」

心の中で思い切り叫んだ。

ポン

小さな音がして火花が散った。

キャン！

犬が鳴いた。

犬は立ち上がりきよるきよる見回すと私を認めた。

ウー。

うなり声を響かせながら、ゆっくりと私の方に進んできた。

え？

どうすれば？

私は犬が近づいてくるのにあわせて後ろに下がった。

次の瞬間犬が飛び掛ってきた。

あかん！

私は心の中で叫んだ。

ドーン！！！！

さっきより大きな音とまぶしい光。

でも今度は弾き飛ばされなかった。

犬のほうはさっきより飛ばされ、息もしていないようだった。

「やったじゃん、リン！」
ハヌルが駆け寄ってきた。

やった？
私か？

「雷落とせるんだ、リン。
思い通りに力を出すにはまだ訓練がいるのかもしれないけどね」
ハヌルのうれしそうな顔を見ると、私もうれしくなった。

「私にできた？
私にそんな力がホンマにあったんや」
私は安心から涙が出そうになった。
ハヌルは嬉々として喜んでくれていた。

「この2匹を持って帰って、今日はお祝いだ」
ハヌルが、今倒した2匹の後ろ足を持って引きずりながら林のほうへ歩いた。
私はハヌルから、犬を1匹受け取って同じように引きずりながら歩いた。

林に入る手前で、ハヌルが犬を担いで両肩にかけた。
「リン、ここからは引きずっちゃいけない。
臭いにつられていろんなのがきちゃうから」
ハヌルにそういわれて、私も犬を担ぎ上げた。
思ったより重くなかった。
犬を肩に担いで、ハヌルと並んで歩いた。

「もしかしたら…この犬、さばくんやんなあ…」
私は包丁で犬を引き裂く場面を想像すると気分が悪くなってきた。

「最初は抵抗あるよね。
でも、すぐ慣れるよ。」

この子たちは死んだ瞬間血が消えるから、思ってるほど気持ち悪くないよ。

ちょっとパサついててあんまり美味しくないけどね」

首を落としても血が出なかった。

見た目より軽い。

それは、ハヌルの言うとおり血が消えるからなのか、と妙に納得した。

納得はしたが、血が出なくても、犬が切られるところは見たくないと思った。

戦闘 4

ハヌルのログハウスまで戻ると、裏の井戸の近くに犬を2匹ともおろした。

ハヌルが腰のナイフを抜くのが見えたので、私は慌てて顔をそむけた。

「そんなに恐がらなくても」

ハヌルが笑った。

5分も経たないうちに、ハヌルが私に何か投げて寄越した。

「きゃっ！」

思わず私は悲鳴をあげた。

毛皮だった。

犬の形そのままの。

しかも2枚。

5分とかならないうちに、皮を2枚剥いてしまっなんて……。

いやでも皮を剥かれた犬が見えた。

思ったほど気持ち悪くなかった。

血がないせいか、まるででかいビーフジャーキーの塊りだった。

ハヌルは手際よく肉をはがしていく。

面白いほどポロポロと肉がはがれる。

標本のような骨が残り、肉がきれいにそげた、

「へえ、上手やね」

私は思わず感嘆の声を上げた。

「おいしくないけど、ばらすのはすごく楽なんだ、この子らは」
ハヌルは鍋に肉を全部入れ、井戸の水を鍋の中に入れた。
つるしてあつた野菜類を、犬をばらすとき以上に手際よく切ると、
全部鍋の中に入れた。

大きな鍋を私とハヌル、二人がかりで家の中に運んだ。

「一人でいるときは、こんなにたくさん一度に作ることもなかった。
たくさん作って、家族で食べるとおいしいよね」
ハヌルは暖炉に鍋を置き、火をつけながら言った。

「家族？」

私が聞き返した。

「会ったときから、私はそのつもりだよ。

気づいたと思うけど、私とあなたは同じ種族。

でも、このあたりには同じ種族の人たちはいない。

遠くに私たちに似た種族が住んでるらしいけど、コマを傷つける
ようなやつらだ。

わざわざ会いに行きたいとも思わないしね。

浜辺でリンを見つけたとき、どれだけうれしかったか」

ハヌルは、ケトルを持っていったん外へ行くと、戻ってきた。

暖炉の五徳には鍋が乗っているため、直接ケトルを火のそばに置
いた。

ハヌルの言葉を聞き、ハヌルの一連の動きを見ているうちに、私
は激しい睡魔に襲われた。

「魔法使つと、かなり疲れるらしいから、少し横になったら？」

睡魔と戦ってる私を見かねて、ハヌルが言ってくれた。

「お言葉に甘えて……」
言い終わらないうちに、私はテーブルに突っ伏して眠ってしまった。

どのくらい眠っただろう。

眼が覚めたらすべて夢でした。
そんな童話を思い出した。

でも、残念ながら夢じゃない。
眠って目覚めても、目の前にはハヌルがいる。
私の腰にはロッドがささっている。

眼が覚めたときはすっかり夜だった。
暖炉の火の明りと、チェストの上に置かれたランタンの明りでは
んやりとしていた。

部屋の中には、ハヌルが作ってくれた料理のいいにおいが漂って
いる。
ハヌルは、私の向かいで、座ったまま、テーブルに肘をついたま
ま眠っている。

私は椅子から立ち上がり、窓まで行き、外を見た。
木々の隙間から月や星が見える。

夜明け1

「リン、おはよ」

気配を感じて、ハヌルが眼を覚ました。
大きく伸びをすると、ケトルからカップにお茶を注いだ。

「疲れてるときはお茶が一番だよ」

ハヌルにすすめられるままお茶を飲んだ。

甘みがある。

赤いほうのお茶だ。

全身に染み渡るお茶。

私がお茶を飲んでる間に、ハヌルがボウルに犬で作ったシチューをよそい、パンと一緒にテーブルに運んできてくれた。

「犬か・・・」

思わずつぶやいた。

「犬じゃなくて、又ツテ。」

まったく別物の生き物だってば」

ハヌルがチェストからスプーンを二本取り出しながら言った。

肉が多少硬かったが、味は悪くなかった。

ハヌルの腕のおかげなのか、空腹のせいなのかわからなかったが、大量にあったシチューを二人でほとんど平らげた。

「又ツテの骨も皮も、町に持っていったら売れるんだよ。」

皮は自分で細工して服を作ったりもできるけど、裁縫、苦手なんだよね、私」

ハヌルは食べ終わった食器類を部屋の隅に持っていった。

「裁縫かあ

私もできんわ」

ボタン付けすらできない私に、裁縫という言葉は無縁だった。

「そうなの？

ちょっと期待したのになあ。

自分で服を作って、それを売ったら、皮を売るよりかなりもうかるのに」

ハヌルは本当に残念そうに行ってから、振り向いて笑って見せた。

「皮ってなめしたり、処理がいるんやろ？」

私が尋ねると、ハヌルはさっき剥がした皮をテーブルの上に置いた。

臭くない。

生きてた頃よりいい毛並みをしてる気がした。

「この子らはね、私たちのために存在しているようなもの。

肉も剥ぎやすいし、骨も皮もすべてむだなく使える」

血がなくなるから、皮も臭くならないのだろう。

ハヌルの話では、一日放って置くと、肉はカラカラに乾くらしい。

そうになると保存食として重宝するらしい。

「裁縫できないなら、明日このまま売りに行こうか」

ハヌルはテーブルの上の皮を丁寧に四角くたたんだ。

「なあ、ハヌル……」

私は無理に忘れようとしていたことをハヌルに問いかけてみた。

「前おつたところには、戻れんの？」

ハヌルの手が一瞬止まった。

ハヌルは目を手元に落としたまま言った。

「私が浜辺に着いたときは、一人ぼっちで。

毎日帰りたいって泣いてた。

でね、ナムと出会った。

この世界にたどり着いて、何百年と暮らしてるナム。

何百年も帰る方法を探してるナム。

そのナムが帰れないのに、なんで私が帰る方法を見つけれられる？

帰りたい気持ちはあるけど、諦めた。

帰る方法探すより、ここでの生活楽しむ方が大事」

「そか…」

やっぱり方法はないのか…。

答えは解りきってた気がする。

方法がわかれば、ハヌルはとっくに帰ってるだろう。

夜明け2

次の朝、私とハヌルは夕べの食器を洗い、服を着替え町に行くことにした。

一晩寝ると不思議なもので、見るだけで恐かったヌツテたちが恐くなくなった。

むやみに近づこうとは思わないが、平気でそばを通れるようになった。

前日と同じように、ハヌルが町の扉の隙間にナイフをさして掛金をはずして、中に入った。

コヤギはちゃんと番をしていた。

「おはよう、ハヌル、リン。

早いな」

とても前日に昼間から飲んでいたようには見えない。

「おはよう、コヤギ。

昨日はちゃんと寝ずの番ができた？」

ハヌルが尋ねると、コヤギは親指を立てて見せた。

「ちよつとだけ、魔法使えたよ、私」

コヤギに報告した。

「おお！

何の魔法だ？

火か？

火なら俺と同じだ！」

コヤギは想像以上に興奮して喜んでくれた。

「あ……いや……。
残念ながら雷っばい」
私は小さい声で言った。

「雷?!」

うらやましい!

使い方によつては相手を麻痺させれるだろ?
生け捕りにしたいときに重宝するよ」

コヤギは興奮して話し続けた。

まだ使い方がよく分かっていない、と口を挟みたいのだけど、コヤギは魔法談義を続けた。

ハヌルは興奮しきつてるコヤギを呆れたように見ていた。
私はコヤギに両肩をつかまれ、ゆすぶられ、抱きつかれ……。

ここの世界も悪くないなと思い始めた。
テレビもパソコンもないけど、グエムルとかってモンスターがいるけど、悪くない。

温かい人がいるし、ハヌルという家族もいる。

でも……

ハヌルは元の世界に戻ることを諦めたという。
でも、私は諦めない。

いつかもとの世界に戻る。
兄さんを探す。

ウサギを追いかけて穴に落ちた彼女の物語は夢だったけど、
これは夢じゃない。

幻でもない。

この夢幻の世界のどこかに、私が以前暮らしてた世界と通じる道
があるはず。

いつかきつと戻る。

でも、その日まで、この世界のみんなと楽しく暮らしていこう。

この世界のことには、まだまだ分からないことだらけ。
だから面白いと思う。

コヤギに何度も抱きしめられながらそんなことを考えていた。

~~~~~夢幻のかなた 第一部 完~~~~~

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3780t/>

---

夢限の彼方 第1部

2011年6月8日13時51分発行